

御嶽神社の神楽 小中学生が継承

保存会の15人活動

都留市与繩の与繩御嶽（みたけ）神社に奉納する神楽を守ろうと、地域の子どもたちが保存会に加わり、活動している。同神社の神楽は明治時代から伝わる伝統行事で、以前は消防団員が中心となっていたが、若者が少なく存続の危機を迎えていた。十五人の小中学生は「早く上手に吹けるようになりたい」とおはやしの篠（しの）笛練習に励んでいる。

「一人前」めざし篠笛習う

同神楽は、毎年九月の第二日曜に開かれる秋の例祭で奉納。例祭前日と当日の二日間、地区内の当番の家でも披露する。「平の舞」「幣の舞」「鈴の舞」「剣の舞」

の四種類で篠笛と太鼓の音に合わせて獅子が舞う。保存会で活動しているのは、都留二小の一年生と二年生、都留二中一年の男女。月二回、保存会の大人から指導

を受けている。今年十九日に市与繩宮農指導センターで行われた練習には十四人が参加。「ヒートロー」、「ビュララ」と音色を文字で書いた「楽譜」を使



篠笛を練習する小中学生。都留市盛里。

い、一つ一つ丁寧に音を出していた。

保存会によると、子どもと大人が一緒に活動することで、希薄になっていた住民同士のつながりが

強くなったという。指導に当たっている会社員谷内新作さん（五〇）は「子どもも大人も楽しんでる。地域の子どもの顔と名前が分かるようになった」と話す。子どもたちの練習は一年以上になるが、演奏できるようになったのは全体の一

割程度。四年の谷内佑君（一〇）は「きれいな音を出すのはとても難しいけれど、早く一人前になれるように頑張りたい」と真剣な表情で話していた。